

## ある校歌伴奏のオーケストラ編曲

絹川 文仁

### One orchestration of the accompaniment of one school song

Fumihito KINUKAWA

#### Key-words

orchestration, school song

#### 1 はじめに

本稿は、ある高校の校歌にオーケストラ伴奏の編曲を施した研究発表である。具体的には、筆者が非常勤講師を務める東京は西日暮里の開成学園校歌に編曲をしたのだが、平成23年11月26日（土曜日）午後4時～開成高校学生ホールにて催された、開成高校「歌唱」選択者によるベートーヴェン「第九交響曲全曲演奏会」の冒頭を飾った校歌斉唱がその初演となる。因みにそれらの指揮も筆者が担当した。

筆者の知る限り、同校の校歌は諸行事等、事ある度にピアノ伴奏のみで歌われており、また創立記念等で録音されたものもピアノ伴奏ばかりであった。

予め断っておくが、筆者は決してピアノ伴奏を全面否定する立場にはない。我が国の全ての学校教育におけるピアノの存在価値は、今更くどくどと説明する必要など皆無であることは自明の理である。ところが、前述の通り、ベートーヴェンの第九交響曲というフルオーケストラと大混声合唱、そして独唱者4名からなる大曲を演奏するコンサートの冒頭では、ピアノ伴奏が当たり前の校歌でもやはりオーケストラ伴奏によるもののほうが流れとして極めて自然である。況してや、それを歌う当該生徒をはじめ学校関係者、聴衆の全ては初演として初めて体験するわけで、演奏自体の出来不出来事はともかくとして、その教育的・芸術的意義は決して小さくないと言えよう。

尚、「歌唱」は筆者が担当する開成高校の芸術選択科

目である。また、開成学園は男子校ゆえ、前述のコンサートには、女声合唱および独唱者、そしてオーケストラにおいて外部からの賛助出演者があったことを予め付記しておく。

#### 2 編曲の意義

筆者は小学校教諭、幼稚園教諭、保育士を養成することも学科の1スタッフである。その立場における編曲という作業の意義は「音楽教育の実践において何よりも大切なことは、児童・生徒に新鮮で魅力ある音楽を与えるということであろう。そのために教師は、教える対象の実態に即した素材を選択していかなければならない。ところが、その素材自体が常に現実的に望ましい形で用意されているとは限らない。そこで、素材の教材化、即ち編曲という作業が必要となる。指導者に対する編曲能力の必要度は、最近とみに増してきているようである」「幼稚園教育要領並びに保育所保育指針における表現の意義を少なからず全うすることに他ならない」と既に述べた（\*1）。

本稿でも以上を改めて確認しながら、研究を進め、以下を提示するに至った。

---

\*1 千葉経済大学短期大学部研究紀要第6号 2010 p.69~70



#### 4 オーケストラ編曲を施したもの

3を基にオーケストラ編曲を施したものが以下である。本稿では弦楽器、管楽器、打楽器ごとに掲載した。

##### 開成学園校歌弦楽器パート

Moderato (♩=80)

Violin I  
Violin II  
Viola  
Cello  
Contrabass

*mf*  
*cresc.*  
*decresc.*

Violin I  
Violin II  
Viola  
Cello  
Contrabass

*f*  
*cresc.*  
*decresc.*

Moderato (♩=80)

The first system of the musical score includes parts for Flute, Oboe, Clarinet in B♭, Horn in F, Bassoon, Trumpet in B♭, Trombone, Fl. (piccolo), Ob., B♭ Cl., Hn., Bsn., B♭ Tpt., and Tbn. The Flute, Oboe, Clarinet in B♭, Horn in F, Bassoon, and Trombone parts are silent. The Fl. (piccolo) part has a single note on G4. The Ob. part has a single note on G4. The B♭ Cl. part has a single note on G3. The Hn. part has a single note on G3. The Bsn. part has a single note on G2. The B♭ Tpt. part has a single note on G2. The Tbn. part has a single note on G2. The Flute, Oboe, Clarinet in B♭, Horn in F, Bassoon, Trumpet in B♭, and Trombone parts are silent.

11

F.I. *cresc.* *f*

Ob. *f*

B $\flat$  Cl. *cresc.* *f*

Hr. *f*

Bsn. *f*

B $\flat$  Tpt. *f*

Tbn. *f*

12

F.I. *cresc.* *rit.*

Ob. *cresc.* *rit.*

B $\flat$  Cl. *cresc.* *rit.*

Hr. *cresc.* *rit.*

Bsn. *cresc.* *rit.*

B $\flat$  Tpt. *cresc.* *rit.*

Tbn. *cresc.* *rit.*

13

F.I. *cresc.* *allargando*

Ob. *cresc.* *allargando*

B $\flat$  Cl. *cresc.* *allargando*

Hr. *cresc.* *allargando*

Bsn. *cresc.* *allargando*

B $\flat$  Tpt. *cresc.* *allargando*

Tbn. *cresc.* *allargando*

開成学園校歌打楽器パート

## 5 編曲の意図、留意点

前述の通り、上記はベートーヴェンの第九交響曲演奏会の冒頭を飾るものとして編曲したゆえ、1 番の歌詞を主眼としながら実演でも 1 番のみとした。

以上を踏まえつつ、編曲を進めるにあたっての留意点は以下である。

- 原曲のテンポ指示四分音符＝130は、ピアノ伴奏における適切なテンポと位置づけ、オーケストラ版ではよりゆったりとしたテンポのほうが、より厳かな雰囲気が出ると見込み、四分音符＝80とした。
- 原曲の強弱記号を原則的に活用したが、後述の通り、17小節以降のクライマックスではテンポに変化を与え、よりダイナミックなものに仕立てた。
- 原曲には前奏 4 小節があるが、歌い出し 4 小節を引用して全員が歌いやすくした便宜的な狙いとしての前奏であることはほぼ間違いなく、特に大きな芸術的意味

合いはないと思われる。よって、本稿では前奏なしで（静かに）歌い出すことによって、前述のような厳かさを表出させた。

- 初演時のオーケストラ編成、即ちベートーヴェンの第九交響曲の楽器群は、ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスの弦楽器、フルート（ピッコロ）・オーボエ・クラリネット・バズーン・ホルン・トランペット・トロンボーンの管楽器、ティンパニ・バスドラム・シンバル・トライアングルの打楽器である。歌詞のニュアンスを、できうる限り音に描写・転化させるために、これらの楽器群を以下のように最大限活用した。

I、1～4 小節「ときわのみどり いろはゆる」は、開成学園を取り巻く緑豊かな環境を“ほのぼのとした、穏やかな雰囲気且つ校歌に相応しい厳かな雰囲気”で醸し出すために、敢えて弦楽器のみとした。以下、曲

の終わりまで弦楽器は大凡原曲のピアノパートの和音を踏襲して、弦楽アンサンブル特有の落ち着きを持った伸びやかさをひとつの安定した土台とした。このような雰囲気こそ、古今東西を問わず、公教育が有すべきある種の理想的な境地であることは疑いようのないものであろう。

Ⅱ、5～8小節「どうかんやまの まなびやに」は、前の小節の“おだやかな雰囲気のまま”視点をまなびや（＝校舎）に移す様を、弦楽器にフルートとオーボエのみ主旋律を演奏することを加えることによって表現した。

Ⅲ、9小節「あこがれつどう わこうどが」と、いよいよ学校の主体たる生徒の存在をうたうにあたり、それを8小節目のバズーンが導き出し、そのまま主旋律を演奏する。バズーンは低音部譜表の楽器ゆえ、低音部譜表＝男声パート、即ち男子校の開成学園に応じたセクションなのである。尚、9～11小節のフルートとオーボエは「わこうど」の“若いエネルギー”を表現すべく、きらびやかな趣を有した高音部のオブリガートを施した。

Ⅳ、12小節のクラリネット2本によるクレッシェンドの上行進行が13小節以降のフォルテの楽想をリードし、クラシック音楽における男性の象徴ともいべき楽器のホルンもそこから加わることによって、木管楽器アンサンブルに厚さを持たせ、「はるけきゆくて のぞみつ」という、輝かしい未来に向かって邁進する志といった意味に更なる力強さを加えた。特に、15小節のホルンのパッセージは対応する詞「のぞみつ」に力感を与えた。また、13～14小節のフルートとオーボエのオブリガートは、この曲の主旋律において、リズム構成のある根幹を成している付点8分音符と16分音符の組み合わせを、主旋律と一拍ずらして歌の部分とのかけ合い、バトンリレーのような流れを作った。それによって、この歌詞を高らかに歌い上げる若人が複数ないしは多数いるようなイメージとした。15小節3拍目の8分音符と16分音符は、後述の17小節以降のクライマックスを牽引するトランペットを導き出す役割

の音符である。

V、17小節から終わりまでは、曲のクライマックスともいべき部分で、「うとうやいのちの あさのうた」は、開成健児として躍動感溢れる新しい一日をスタートさせる意気込みを高らかにうたおう、といった意味だ。16小節のトランペットのフレーズはその進る意気込みそのものを象徴したが、同時に朝日が昇る様子とも掛けている。下降進行としたのは、やはり落ち着きを持った意気込みをイメージさせたいからで、強弱記号で表すならばallargando（伊語アッラルガンダ、徐々に強くゆっくり、堂々と）が相応しい。18小節からはトロンボーンも加わり、弦楽器管楽器全てが出揃ってまさに“全員が”堂々とうたう様子を醸し出した。残る打楽器のシンバル・ティンパニも19小節から入り、リタルダンドを配置することによって、重厚さを増幅させながらのエンディングとした。ここで特に注意したのは、19小節の2拍目に打楽器を登場させたことで、これに合わせて管楽器も同小節の2拍目で（原曲にはない）音を追加した。この意図は、原曲の表現ニュアンスを極力損なわない範囲で、このフレーズに新たな生命感を宿らせようとしたことである。と言うのも、前掲のように原曲の19小節は、歌・ピアノ伴奏も、それぞれ2分音符と8分音符のタイ・付点2分音符でほぼこの小節全体を伸ばして演奏するが、筆者の経験では、折角のクライマックスが時として間延びしている感が否めない演奏に出くわす。これには演奏技術上の問題もあることは認めつつ、筆者はこの小節の2拍目に管楽器打楽器の音を新たに加えるという別な手段によって、より引き締まったフレーズに仕立てた。この追加した音に対する筆者のイメージは“うとうや いのちの”という呼びかけに対して“そうだ！”と全体が元気良く相槌を打つもの、と言えよう。このように原曲のニュアンスを大きく逸脱しない範囲で、高度な音楽技能を持ち合わせていない生徒でも、より大きな感動をもって歌い上げられるような工夫はあってしかるべきである。詳細は後述するが、初演においてこの工夫は予想以上に好評でもあった。



## 6 初演での反響

前述のように、上記の編曲は、平成23年11月26日（土曜日）に開成高校学生ホールで初演された。

普段は原曲のピアノ伴奏でしか歌ったことのない同校生徒が初演に関わり、また多くの教職員や保護者も聴いたが、演奏後にそれぞれの感想を集めたので、以下の通り列举する。

### ○生徒の感想

- ・開成に入学して以来、何度となく歌ってきた校歌だが、ここまで真剣に歌ったのは今回が初めてだった。今までにない編曲で、歌っていてここまで気持ちよくなれるとは思っていなかった。まさに熱き血潮のたぎる開成健児だったのではないかと思う。是非もう一度うたってみたい。
- ・校歌は普段伴奏なし、もしくはピアノ伴奏でしか歌えないのに、オーケストラの伴奏付きで良かったと思います。ピアノだけでは出せない音の重なった感じがあって、貴重な経験になりました。
- ・オーケストラversionとても良かったと思います。ああいうオーケストラversionにする場合、どうしてもあまり出番のない、重要なファクターでない楽器が出てくるのが常だと思いますが、舞台から見ていると、それぞれの楽器に出番があり、ソロパートみたいなものもあり、とても感動しました。自分の母親も、ピアノをやっているM音楽大学を出ています。その母も、素晴らしかった、今回の第九発表会で終わらせるのは勿体ない、と言っていました。
- ・普段とは違い、荘厳で良かったです。
- ・オーケストラによって響き渡る音楽の中で歌うことができたのは、開成生活の中でも滅多にできない貴重な経験だった、いい思い出になりました。
- ・シンバルのタイミング、そして金管の低音が個人的に好きです。また、指揮にも躍動感があり、とてもカッコよかったと思います。
- ・オーケストラと校歌を歌うことができて、とてもいい思い出になった。次第に盛り上がっていき、ティンパニが19小節から激しくなっていくところなど、

気分が高揚していき、質実剛健としていて校歌に合っていると思った。途中からトランペットが加わるころが、曲にスパイスをもたらししているようで好きだった。

- ・今までピアノでしか歌ったことがなかったが、オーケストラに合わせたバージョンは壮大だった。
- ・オケバージョンでうたうと、いつものピアノ伴奏に比べて、少し重い豪華な雰囲気になって、あの発表会の場にふさわしい感じになったと思う。僕は、後半にトランペットが入ってくるのがすごく気に入りました。
- ・校歌を初めてピアノ以外で聴いて、新鮮な気分がした。オーケストラで聴くと、校歌ってカッコいいなと思った。音楽は編曲次第で、同じ曲でも全く違うように聴こえると実感した。
- ・オーケストラに編曲された校歌は、通常のものより神聖な感じがした。
- ・初めてオーケストラ編曲で歌いましたが、ピアノ伴奏と違って荘厳な感じが出て良かったです。
- ・オーケストラヴァージョンの校歌ということで、いつもと違った感じで歌ってみるのもいいもんだなあと思いました。
- ・校歌は音楽部で一応毎年歌ってはいるのですが、オーケストラで歌うというのは初めての体験で、とても新鮮でした。
- ・オーケストラ形式に編曲された校歌は、普段聞き慣れているそれとは迫力が違い、まるで別の曲のようでした。最後の部分を大きく変えてあったことが良かったです。
- ・オーケストラ風にアレンジした校歌は、結構カッコよくて良かったです。
- ・いつもと違うオーケストラによる演奏で、迫力がありました、オーケストラが凄いか、編曲が凄いかはわかりませんが。
- ・校歌のオーケストラ版について批評してみることにする。とは言っても、歌ってみて、聴いてみてみた感触からいえば、良かった程度程度のことしか言えないが。



### ○開成学園のある教員の感想

- ・序奏がなく、いきなり合唱とともに演奏が始まる形式は、強いインパクトがありました。事前の説明がなく、合唱が一斉に立ち上がり、演奏が始まる演出もその効果を高めたと思われます。アンダンテカンタービレ風なテンポ感は、従来学校行事で斉唱されるテンポ設定とは大きく異なり、重厚さを前面に曲想になっていると感じました。旋律は終始ヴァイオリンが受け持ち、安定した編曲になっているとともに、対旋律には複数の管楽器が短い曲の中でも有効に利用されていると思いました。スコアを見ると、4小節目の3拍目がゲネラルパウゼになっている点は、その後の8小節目のファゴットの下降音形、12小節目のクラリネットの上行音形を効果的に聴かせていると感じました。初演では、13小節目以降の木管の対旋律がやや合唱にかき消されてしまっていて聞こえにくかったのが残念でしたが、16小節目のトランペットの下降音形ですでにラレントがかかっていて、その後のアッラルガンドを予感させ、19小節目2拍目の木管金管のF-durの和音にシンバル、ティンパニのトレモロで最高潮に達する編曲は、校歌の一番だけを歌ったり聴かせたりするのにはこのくらいの重厚感がちょうどいいのかなと、思いました。今までに聴いたことのない骨太の校歌で、新しい解釈を知った感じがしました。

### ○保護者の感想

- ・校歌は運動会などで聴くことしかできませんでしたが、重厚なサウンドに感激しました。今後もこの大合唱を続けて欲しいです。
- ・校歌のアレンジが素晴らしかったです。
- ・最初の校歌演奏の時から目に見えない波動が全身に伝わってきました。
- ・まず最初の校歌が心に響きました。生の素晴らしい演奏と開成生徒の歌声が素晴らしく、CDがあれば是非購入して、何度も聞きたいと思いました。
- ・今まで聴いた校歌の中で、一番荘厳且つ華やかでした。最初を飾るのに相応しかったと思います。

- ・校歌は格調高く編曲され、美しいと感じました。シンバルの明るい音と共に、生徒達の未来を思い、あたたかい気持ちにさせられました。

以上を総括するに、筆者の予想以上に好評を得たと言いつつ差し支えなかろう。生徒からも保護者からも、通常接してきた校歌より荘厳、壮大、神聖、重厚、といった評価がなされ、部分的にも、前述の通り筆者なりに拘ってみせたトランペットや打楽器のアレンジに少なからぬインパクトを感じたという反応が複数あった。特に「シンバルの明るい音と共に、生徒達の未来を思い」という保護者の声、また生徒の「音楽は編曲次第で、同じ曲でも全く違うように聴こえると実感した」「熱き血潮のたぎる開成健児」などは本稿の編曲意図にほぼ合致するものである。

## 7 おわりに

筆者の専門は編曲や作曲ではないが、保育士や教員養成機関のスタッフとして、少しずつ裾野を広げながら研究や教育を地道に進めていくことが半ば常識的であることは疑いようがない。それは、あっさり言って学生達の模範になるだけでなく、結局は本来の自己の専門というものとの多面的に、或いは有機的に必ず反映しあうからである。本稿の編曲の意図、留意点においても、筆者の元々の専門たるオペラにおける数々の経験がその基となっており、それ以上でもそれ以下でもない。

また、本稿においては敢えて編曲や作曲の専門家に助言等を請うことはしなかった。前述のような問題意識をしっかりと踏まえて、筆者の音楽全般におけるトータルな能力というもの（＝音楽教育者としての資質が問われる）が現時点でどれほどであるかを、ある意味で試したかったからである。が、いかに本稿の初演の反響が好ましい結果だったとしても、その道の専門家のアドバイス等は徐々に仰いでいくことはひとつの王道であることは間違いない。そのあたりを今後の課題として、次回は本学の校歌編曲に取り組んでいくこととする。

尚、末尾ながら、本稿をまとめるにあたり、原曲の楽譜等諸々の資料を提供して下さいました開成学園音楽科教諭

小鮎勝博先生、同校数学科教諭で管弦楽団顧問の林正人先生に厚く謝意を表したい。